

コリント人への手紙第一 4章 1-13節「神の奥義の管理者として」

小池 宏明 牧師

コリントにある教会で、仲間割れや分派の問題が起きていたことに関して、パウロはあくまでも救い主イエス・キリストこそすべてを治めている中心であることを強調して解決しようとした。その後、自分たち伝道者の立場をはっきり示している。

*主の奴隷、福音の管理者

4章1、2節「人は私たちがキリストのしもべ、神の奥義の管理者と考えるべきです。その場合、管理者に要求されることは、忠実だと認められることです。」福音を伝えた伝道者たちは「キリストのしもべ」である。ここで「しもべ」という言葉は、一番の下働きの奴隷を表している。また伝道者たちは「神の奥義の管理者」である。ここで「管理者」とは、ご主人の意向に従って「家を整える人」のことである。そして、当然管理者には忠実であることが求められる。忠実とは、言葉と生活が一致していることである。また「神の奥義」とは「福音」のことである。「福音」とは、救い主イエス・キリストが私の罪咎の身代わりとなって十字架で処刑されたことを信じて受け入れるだけで、私の罪が赦されて罪無しと認められることである。この「福音」を「管理する」と言うことは、福音に何か混ぜ物をしたり、薄めたりしないで、はっきりと証しすることであり、そして証ししたとおりに生きることである。私たち、キリスト者も、しもべとして管理者としてキリストに仕える者である。それゆえ、他人からの評価を受けたり、その評価を気にしたりする必要はない。また、自分自身で自分の評価もできない。

(3-5節) なぜなら、主イエス・キリストのしもべは、終わりの日に、キリストご自身から判断され、評価されるからだ。

*高ぶらずに謙って

6節で、分派問題は高ぶりに起因すると語る。「兄弟たち。私はあなたがたのために、私自身とアポロに当てはめて、以上のことを述べてきました。それは、私たちの例から、「書かれていることを越えない」ことをあなたがたが学ぶため、そして、一方にくみし、他方に反対して思い上がることのないようにするためです。」パウロとアポロの生まれも育ちも、相当違うことが分かっている。それは「書かれていることを越えない」ことを学ぶためであった。「書かれていること」とは旧約聖書をはじめ、イエス様の弟子たちが語ったり、書き残したりした文書が含まれていると思われる。二人とも、違いはあっても「福音」の枠から超えない忠実な生き方をした。私たちも福音の忠実な管理者として互いに仕え合って生きよう。